

1106 : 1-37, pls. 1-3.

———.1980. Tertiary climates and floristic relationships at high latitudes in the Northern Hemisphere. *Palaeogeogr. Palaeoclimat. Palaeoecology*, 30 : 313-323.

———& POORE, R. Z. 1982. Tertiary marine and nonmarine climatic trends. "Climate in Earth History" (ed. BERGER, W. & CROWELL, J. C. ), 154-158. *Natn. Acad. Sci. Stud. Geophysics*, Washington, D. C.

山中二男, 1979. 日本の森林植生. viii+219pp., 築地書館, 東京.

YAMANOI, T. 1974. Note on the first fossil record of genus *Dacrydium* from the Japanese Tertiary. *J. Geol. Soc. Japan*, 80 : 421-423

——— (山野井 徹)・津田禾粒. 1986. 富山県黒瀬谷層 (中部中新統) に見出されるマングローブ林の様相. *国立科学博物館専報*, no. 19 : 55-66, pls. 3, 4.

———・———・糸魚川淳二・岡本和夫・田口英次. 1980. 西南日本の中新統中部から発見されたマングローブ林植物について. *地質学雑誌*, 86 : 635-638.

(1989年10月8日受付)

#### ブナ北限形成とその成立要因 (生態学会シンポジウム) の報告

1989年8月23日に生態学会の多数のシンポジウムの一つとして, 上記のシンポジウムが開かれた。植生史研究にとってきわめて重要な問題なので, なにが話題になったかを紹介しておく。コンビナーは渡邊定元氏 (東大農・演習林) で, コンビナーによる総論の後, 次の5つの話題提供あった。1: 渡島半島歌才川湿原 B.P.2100年間のブナ花粉の変化。萩原法子 (札幌・清修高)・矢野牧夫 (北海道開拓記念館)。2: 渡島半島の蓬揃山湿原, うぐい沼の花粉分析より見た完新世におけるブナの消長。五十嵐八枝子 (北大・理)・安村史子 (札幌・柏丘中)。3: 渡島半島のブナ植生と土壌。渡辺至 (函館営林支局)・福嶋司 (東京農工大)・梨本真 (電力中研)。4: 肥大生長速度からみた北限ブナの特異性。萩原信介 (国立科博・自然教育園)。5: ブナの生長と光周性と温周性。長尾精文 (森林総研)・渡邊定元

1と2の話題では, 花粉化石を用いて, いつ頃からブナが渡島半島に到達していたかが論じられた。1の発表は黒松内低地帯での分析で, 下低の2760年前以降連続して産出するが, 5%に達するのは1100年頃であり, これ以降はブナ林が存在したと論じた。2の発表では渡島半島の5地点の分析結果を用いて, 渡島半島南端には遅くとも5300年前に到達し, 黒松内低地帯の約100km西のうぐい沼や黒松内低地帯が太平洋に面する静狩には約800-900年前に達し, 歌才川にはさらに遅れて到達したと推定した。塚田松雄氏が1982年に日生態会誌や *Bot. Mag. Tokyo* に発表された。約7000年前にすでに現在の北限地に到達していたというモデルは否定されたわけである。北限地のブナはいちじるしく生長がよいこと (4の発表) やファイトトンでの人工環境下ではブナに距歯が現われたり, つる状の生活形などに変化すること (5の発表) なども報告者には興味深かった。 (南木陸彦)